



1 作型・圃場の選定

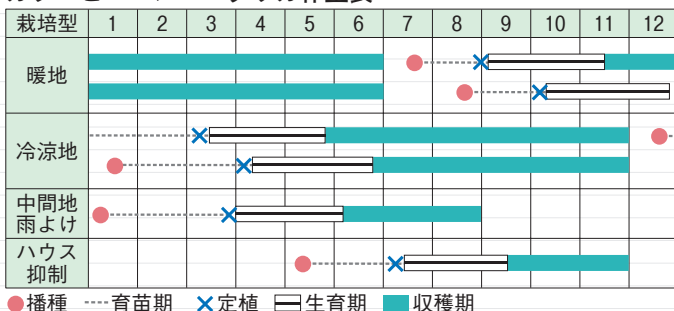
～気候に応じて作型を選び、圃場を整える～

①土地の気候に合った作型設定が重要

カラーピーマン・パプリカの生育適温は17～30℃で、安定した着果を見込むには最低夜温が25℃以下でなければなりません。したがって、気候に合わせた無理のない作型設定が重要で、ハウス栽培を基本とし、冬場は暖房が必要となります。

西南暖地ではクリスマス需要の見込める12月出荷からスタートし、夏前まで収穫する7月までの促成栽培をおすすめします。冷涼地では12月～1月に播種する半促成の長期栽培とし、輸入物が品薄になる8～9月の出荷を重視するとよいでしょう。一般地では真夏と真冬を避け、春の雨よけ栽培および秋の抑制栽培の2作型で出荷を行います。

カラーピーマン・パプリカ作型表



人気上昇中の カラーピーマンを 取り入れる

カラーピーマン・ パプリカの 長期栽培管理技術

～「フルーピーレッド」「フルーピーイエロー」
「レッドホルン」「イエローホルン」など～

タキイ 研究農場
うらしも とういち
浦 霜 聡一

国内で流通するパプリカは、海外で育成された品種が主流ですが、晩生種が多いため栽培が難しく、果実も大きすぎて日本の消費形態に合わない問題があります。タキイの「フルーピーレッド」「フルーピーイエロー」は、日本の小さな施設に向く早生性と栽培性を持ち、サイズも手ごろなパプリカタイプのベル形カラーピーマンなので、生産者や消費者の支持を徐々に得ています。特に直販で人気上昇中です。また、兄弟品種の「レッドホルン」「イエローホルン」は新しい形の牛角形カラーピーマンで、業務・加工用など新規需要の掘り起こしが見込めます。

これらのカラーピーマン・パプリカ類は、青切り収穫のピーマンとは栽培方法に多くの違いがあります。さらに、長期収穫をする場合は、着果制限による草勢維持と完熟までの管理が必要で、より高い技術が要求されます。ここでは「フルーピーレッド」「フルーピーイエロー」「レッドホルン」「イエローホルン」を、安定的に長期間収穫していくための基本的な栽培技術を紹介します。

1 作型・圃場の選定

②ピーマンによい条件を整える

カラーピーマン・パプリカは主枝での収穫が基本なので、4 m以上の軒の高いハウスが有利となります。しかし、「フルーピーレッド」「フルーピーイエロー」「レッドホルン」「イエローホルン」は節間が短く、斜め誘引を行えば軒の低いハウスでも長期にわたる収穫が可能です。

ピーマン類は過湿に弱い作物なので、水はけのよい圃場づくりを心掛けましょう。定植の1カ月前に堆肥と苦土石灰を施し、畑になじませておきます。元肥は10 a 当たりチッソ20~25kg、リン酸25~30kg、カリ20~25kg程度とします。チッソ肥料を初めから多く投入すると、しり腐れ果の原因となるので、追肥で少しずつ補うようにします。

畝幅は約160cmとし、株間は20cmに設定します。栽植密度は、主枝2本仕立ての場合で10 a 当たり3,000株、枝数は6,000本程度になります。また、短期栽培では主枝3本仕立てとし、株間を少し広めにとりますが、主枝数は同じ10 a 当たり6,000本とします。

促成栽培では夏場の定植になるので、敷きわらなどを

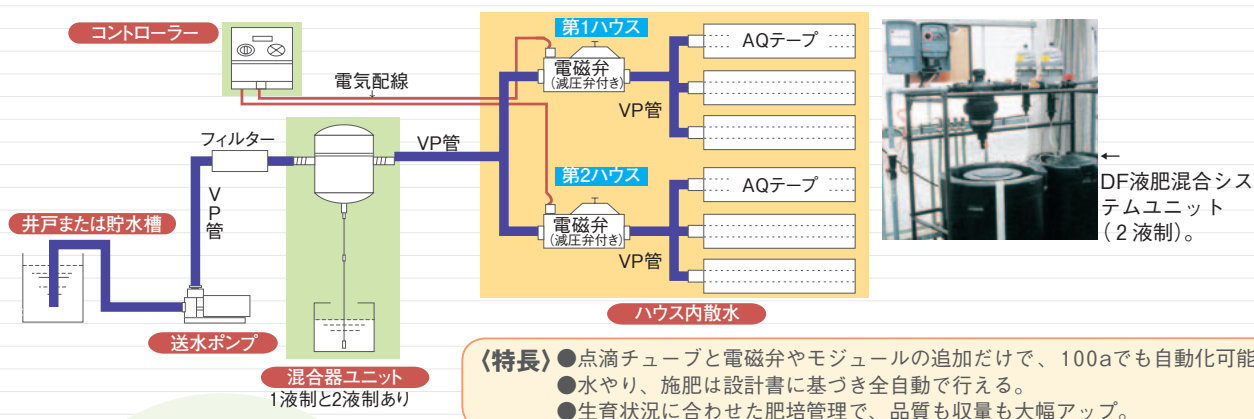
して地温の上昇を防ぎ、活着と根張りをよくするため、心土にしっかり水分をもたせて畝を立てます。また、この作型では日照が不足しがちなので、ハウスや内張りカーテンをできるだけ新しいものに張り替えてから栽培を始めましょう。

③養液土耕（ドリップファーム）がおすすめ

カラーピーマン・パプリカ栽培は、連続的に追肥と灌水を行う養液栽培に向いた品目です。ところが、海外のパプリカ品種はその多くがロックウール栽培向けに育成されていて、土壌病害の問題などから、日本での土耕栽培には不向きとなります。また、ロックウール栽培には多額の初期投資も必要です。

しかし、「フルーピーレッド」「フルーピーイエロー」「レッドホルン」「イエローホルン」は、土耕とロックウールの両方に適しているため、より設備投資が少なく済む、タキイの養液土耕「ドリップファーム」をおすすめできます。生育状態に応じて肥料成分が選べ、よりカラーピーマン・パプリカに適した、灌水・施肥管理を行うことが可能です（第1図）。

第1図 ドリップファーム® 散水システムの概略



2 播種から定植まで

～苗姿が作の良否を左右する～

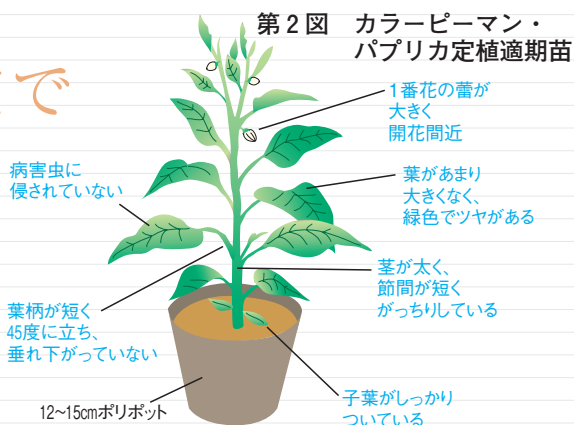
①苗を徒長させない

がっちりした苗を作るには、促成栽培では12cmポット、半促成・雨よけ栽培では15cmの大きなポットを利用します。ポットへの移植は、通常、本葉2枚程度で行います。高温期は萎れやすいため、移植後に遮光を行ってスムーズな活着を心掛けましょう。

育苗中に本葉が触れあい、込みあうようであれば、随時株間を広げて徒長を防ぎます。促成栽培では高夜温が徒長の原因になるので、できるだけハウスを大きく解放し、夜間の気温を下げるよう心掛けます。

②定植後のスムーズな活着が重要

カラーピーマン・パプリカの定植適期は、1番花が開花する3日ほど前です。蕾の見えるような若苗や、1



番果が着果しているような老化苗は、過繁茂や活着不良になりやすく、初期生育が順調に進みません。

高温期の定植となる促成栽培では、葉から水分が多く蒸散し、定植後に萎れやすいため、活着には特に注意を払います。定植は晴天日の日中を避け、夕方に植えるか、曇った日を選びます。苗が活着するまでは、遮光資材で直射日光を遮って萎れに対応します。

3 栽培初期の管理

～定植後は樹作りからスタートする～

①摘果と誘引・枝整理

長期栽培では後半の草勢維持が大変重要になるので、栽培初期にしっかりと根の張った株を作ります。

定植後、苗が活着したら1段目の花を摘花します。以後、3段目までは必ず摘花を行って、初期に草勢をつけておきます。3段目の花以降の枝分かれでは、分枝に強弱が出てくるので、このころに最も太い枝を2本選びます。それを主枝に見立てて吊り上げ誘引し、細い分枝は側枝として1節で整枝します。4段目以降は主枝にすべて着果させていきます。側枝も着果させておいて、主枝、側枝の果実から形の悪いものを摘果するとよいでしょう（第3図）。

また、着果期に夜温が25℃を超える日が続くと、花粉の捻性が悪くなって落花するので、夜の間もしっかりと換気します。

②灌水管理と追肥

ピーマン類の根は乾燥にも過湿にも弱いので、土壌水分が一定に推移するように管理してやります。果実が肥大を始めてから萎れにあと、しり腐れ果が発生しやすくなるので、灌水管理は遅れないよう行います。盛夏期の晴天日には、1株当たり1日1.5～2ℓの水が必要です。

最初に着果させた果実が膨らんだら、追肥をスタートします。液肥ならチッソ成分で10a当たり1kgを目安に、1週間に一度の割合で施します。

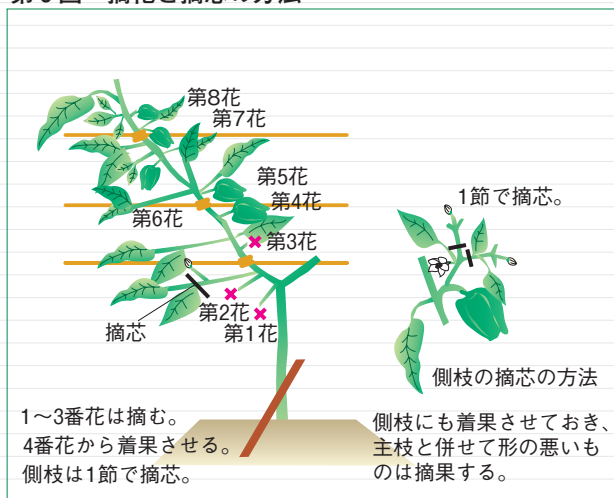


↑ カラーピーマンの生育初期の様子。

③強勢・弱勢に対する対応

草勢が強すぎると花が落ちてしまい、結果としてさらに過繁茂になるという悪循環に陥ります。草勢が強い場合の対策として、摘果を控える、下葉をとる、整枝を早めに行うなどが挙げられます。逆に草勢が弱すぎる場合、側枝はすべて摘果し、枝整理を控え、追肥と灌水を多めに行って樹勢の維持に努めます（第4図）。

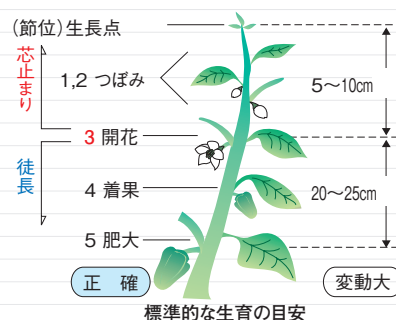
第3図 摘花と摘芯の方法



第4図 草勢判断の目安

①生長点付近で判断

- ・生長点近くで開花(下図の3より上位で開花)→草勢低下
- ・生長点のかなり下で開花(下図の3より下位)→徒長ぎみ



②花器で判断



4 収穫期前後の管理

～生理障害に注意し、適期収穫を心掛ける～

①障害果を出さない工夫～障害別の原因と対策～

しり腐れ果

カルシウムおよび水分不足と、チッソ過多が原因です。特に、高温期には葉からの蒸散が多くなり、果実への水分の転流が滞ることが主要因です。葉枚数が多く果実数が少ない場合に、多発する傾向が見られます。そこで、蒸散量を減らし、水分を確保してやることが重要です。

具体的な対策は次の通りです。

- ・少量多回数の灌水。
- ・カルシウムを含む資材の葉面散布。
- ・換気を十分に行ってハウス内の温度を下げ、蒸散量を減らす。
- ・梅雨明け後、晴天時にハウスを遮光する。20～30%の遮光率が適当。

ひび割れ果

これには、果実表面の結露が原因で発生する細かいひび割れと、果実内水分量の急激な変化、高温、直射日光、収穫遅れなどが原因で発生する大きなひび割れがあります。どちらも6～9月の気温の高い時期に問題となり、気温が下がるにつれて発生は減少します。

前者のように結露が原因となる場合は、次の対策をとります。

- ・少量多灌水。
 - ・ハウス内の換気を行い、温度を低めに保って果実への結露を防ぐ。早朝加温も有効。
- また、後者の対策としては、次のことが挙げられます。
- ・摘葉を控えめに行い、果実に日陰を作ってやる。
 - ・盛夏期にハウス内を遮光する。その際20～30%の遮光率が適当。

ただし、ハウス内を乾燥ぎみにすると草勢が低下し、着果が悪くなるので、草勢とのバランスを上手にとる必要があります。

②収穫時期の見極め

収穫適期は果実の着色度合いを見て判断します。赤色品種の場合、果実が9割程度着色してから収穫します。「フルーピーレッド」「レッドホルン」は、果実のひび割れが黄色品種より発生しやすいので、収穫遅れには注意が必要です。

黄色品種の場合も9割程度着色してから収穫しますが、ひび割れは起こりにくいので、着果数や草勢を判断しながら計画的に収穫するとよいでしょう。

実際の収穫の際は、ハサミやナイフを使い、果柄を果実につけたまま収穫します。こうすることで見栄えがよくなり、日もちも向上します。



↑「タキイホワイト」による夏季の遮光。



↑しり腐れ果の症状（写真 三村 裕）。



↑ひび割れ果の症状（写真 三村 裕）。



↑パブリカやカラーピーマンは赤色・黄色品種とも、9割程度着色したら収穫する。赤色品種はとり遅れに注意（写真 三村 裕）。